

53. 「利尻島の漁業遺産群と生活文化」(利尻島)

日本最北の利尻島には、近世以降の漁業と移住の歴史を物語る漁業遺産群がある。近世には松前藩、近江商人による交易場所がおかれ、アイヌがそれを支えた。島には、豊漁や航海安全を祈る神社や奉納物が残る。幕末以降は出稼漁民が松前や青森、秋田から渡り漁場を拓いた。その記憶は袋調や番屋に、生活文化の名残は石碑や獅子舞などに込められた。島の産物は、鱈、昆布、海鼠、鮑などであった。とくに鱈は、メ箱、身欠き鱈として本州に北前船で運ばれた。利尻島を行き来する海の道は「ヒトは北へ、モノは南へ」という交流史をつくりあげた。



54. 「旭川家具」(旭川市)

旭川家具の特徴は、良質な木材を生かし永く使い続けることのできる美しいデザインにあり、北海道の森林資源を生かして技術・技能に優れた職人を多く輩出するなど特出した優位性も併せ持つ。また、地域に公有化される織田コレクションは、世界の名作椅子と優れたデザインの生活用具で構成された極めて貴重な資料群である。家具を中心としたデザインの歴史を俯瞰できる織田コレクションは、地域の産業を世界に繋ぎ、更なる発展を目指している。



55. 「三浦綾子記念文学館と外国樹種見本林」(旭川市)

「北海道は私の文学の根っこ」と語り、35年にわたって書き続けてきた作家・三浦綾子の「聖地」と言えるのが外国樹種見本林。代表作・デビュー作「氷点」の舞台である。ここに建つ三浦綾子記念文学館は市民運動で生まれ、歩みを続けてきた。2018年9月には、「口述筆記の書齋」を擁する分館も建ち、旭川駅から「氷点通」「氷点橋」「三浦綾子文学の道」を経て見本林へと続く道は、「三浦文学ワールド」と呼ぶにふさわしい。市民が守り育てる文学と森は、氷点のまち・旭川を象徴する癒しと憩いのスポットである。



56. 「増毛山道と濃尻(ごきびる)山道」(増毛町、石狩市)

開削から160年余の歳月を経て、3mを越すクマイザサの中に埋没し、記憶の彼方からも消え去ろうとしていた「増毛山道と濃尻山道」。近世北海道の開拓遺産として、大きな意義があると確信した地域住民を中心に、時には山中泊をしながら復元行動を開始してから約10年、往時の姿を残す良好な状態で遂に2016年に全線復元した。北海道に残された山道の中でも、北海道の名付け親である松浦武四郎は「蝦夷地第一の出来栄」と評した希少な山道であり、近代化に果たした歴史的役割や機能を体感できる遺構。



57. 「北海道の集治監(樺戸、空知、釧路、網走、十勝)」(月形町、三笠市、網走市、標茶町、帯広市)

北海道は北方にある地理性から、集治監(国立刑務所)の設置が集中した。建設は樺戸(現月形町、1881年)、空知(三笠市、1882年)、釧路(標茶町、1885年)、網走(1891年)、十勝(帯広市、1893年)の順であった。目的は初期の西南戦争政治犯収容、後期に重大犯罪人隔離で、北辺防衛と北海道開拓用の北見と上川道路・鉄道建設(樺戸、空知、網走)、幌内炭鉱開発(空知)、硫黄鉱山開発(釧路)、農地開発(帯広)等で、北海道の初期インフラ整備と地方文化形成を担った。



58. 「小樽の鉄道遺産」(小樽市)

明治13年11月28日、小樽手宮一札幌間に、アメリカ人技師クロフォードの指導のもと、待望の鉄道が開通。2年後、幌内炭鉱に到達し、石炭の搬出が開始された。港-鉄道結節のまち小樽は急速に発展し、北海道の開発を先導するまちに成長。石炭から石油に、港も日本海から太平洋に移ったが、北海道の発展を支えた鉄道遺産は、国の重要文化財、北海道にも指定され、野外展示の約50両の車両を含め、鉄道技術の発展を示す貴重な近代遺産として保存されている。また近年、線路跡に散策路を添わせ、各種イベントの会場としても親しまれている。



59. 「大友亀太郎の事績と大友堀遺構」(札幌市)

北海道開拓の中心である札幌の開基は、幕末の大友亀太郎の札幌村建設と大友堀の開削に始まる。大友は慶応2(1866)年に本州土木技術の後継者として大友堀と札幌村建設を主導した。堀は4kmに及び、その一部は現創成川として残り、これは島義勇による札幌の東西の起点となった。大友は明治3(1870)年に札幌を去ったが、その事績は札幌市東区の札幌村郷土記念館内大友関連展示と文書資料で見られる。大友堀の現地遺構は、急速な札幌市の都市化で大方は消失し一部は道道花畔札幌線近辺に残り、貴重な都市歴史遺産として保存されている。



60. 「パシフィック・ミュージック・フェスティバル(PMF)」(札幌市)

パシフィック・ミュージック・フェスティバル(PMF)は、20世紀を代表する音楽家、レナード・バーンスタインが1990年に創設した国際教育音楽祭。毎年夏の1カ月間、世界中から厳しいオーディションで選ばれた若手音楽家(アカデミー生)が札幌に集い、欧米トップオーケストラで活躍する首席奏者等の指導を受ける。その成果は、札幌を中心に道内各地の演奏会で披露され、北海道の夏の風物詩として定着。これまで参加したアカデミー生は総数3,500名を超え世界各地で活躍中。北海道から世界に発信する文化事業として成長している。



61. 「札幌軟石」(札幌市)

札幌軟石は、4万年前、支笏火山の大規模な噴火による火砕流が札幌周辺で冷えて固まった岩石(溶結凝灰岩)である。加工しやすく、耐火・防火性に富んだことから、明治初期より札幌をはじめ北海道内の建造物に多く用いられ、個性的な景観も形づくった。古い石蔵がカフェなどに再利用され、採石場跡は公園や緑地として市民に親しまれているのみならず、軟石は現在も市内南区で採掘され、近年は建物の仕上げ材としても人気がある。また、軟石の雑貨が商品化されるなど、札幌軟石の文化は今も脈々と受け継がれている。



62. 「蝦夷三官寺(有珠善光寺、様似等潤院、厚岸国泰寺)」(伊達市、様似町、厚岸町)

蝦夷三官寺とは、江戸幕府が1804年に現在の伊達市・様似町・厚岸町に建立した3つの寺院の総称である。各寺は蝦夷地で死亡した和人の葬儀とアイヌ民族への仏教布教を目的とし、背景には対ロシア政策として幕府による蝦夷地支配を示す狙いがあった。しかし、アイヌと和人の文化接触は比較的緩やかであったため、アイヌ文化の儀礼・祭祀の独自性は損なわれず、かつ各寺に対する信仰と崇敬の念が保たれたまま今日に至っている。そこには明治期以降とは異なるアイヌと和人の関係史がみとれる。



63. 「しかべ間歇泉」(鹿部町)

「しかべ間歇泉」は、大正13(1924)年、温泉の掘削中に偶然発見された。この資源を活用した地域の温泉旅館は、海の恵みを楽しみつつ湯治できる場として栄え、今日の「海と温泉のまち」を築いた。町内30か所以上の泉源のなかでも、103度の高温の温泉が10分から15分間隔で約500ℓ、高さ約15mまで噴き上がる特徴があり、全国に複数ある間歇泉のなかでも、発見されてからこれまで、衰退することなく一定の噴出間隔と温泉量を噴き上げている。代々、地域住民の手により大切に守り継いできた「地域の宝」は、鹿部の大地を潤し続けている。



64. 「むかわ町穂別の古生物化石群」(むかわ町)

むかわ町穂別地域は、古くから古生物化石の宝庫として研究者や愛好家に知られる。海底の地層が分布し、道天然記念物のクビナグリユ化石「ホベツアラキリュウ」をはじめとする海生爬虫類やアンモナイトなどが多数産出。地元産の貴重な化石資料を収集・保管・展示する穂別博物館を有する。さらに近年、国内最大の恐竜全身骨格化石「ハドロサウルス科「むかわ竜」が発見され、全国的な注目を集める。日本有数の海と陸の古生物化石が揃う博物館には、国内外の第一線で活躍する研究者が集い、また、子どもたちの学びの場ともなっている。



65. 「北海道の簡易軌道」(鶴居村など)

大正末期から昭和40年代の約50年間、簡易軌道は北の大地の開拓を支えた。入植者の生活に欠かせない存在であり、今も多くの人が記憶している。簡易軌道は農業・酪農地域の労苦と発展を語る上で、不可欠な存在であるといえる。村営軌道の遺産は、村の強みである美しい自然の保全と共生を推進するとともに、新たな地域資源を活かした観光の起爆剤となり得る。今後は、簡易軌道がかつて存在した他の自治体とも協働体制を構築し、全道的に簡易軌道の歴史を伝え、活用する仕組みをつくっていくことを視野に入れた活動を目指す。



66. 「千島桜」(北海道各地)

毎年、桜前線が北上し、最後に咲く桜として多くの人に親しまれている千島桜。かつて北方領土に住んでいた人々には、「ふるさとの花」として親しまれており、根室市の清隆寺にある千島桜は、国後島から持ち帰り移植され、道内の多くの千島桜の源流と伝えられるなど、「千島桜」と「北方領土」との結びつきは深い。また、千島桜は北海道の植樹用の樹種として選ばれており、官・民による地域づくりの資源の一つとして、次の世代へ継承したい花である。



67. 「松浦武四郎による蝦夷地踏査の足跡」(北海道各地)

松浦武四郎(1818-1888)は、アイヌの人たちの助言と協力を得ながら6度にわたって蝦夷地を踏査した。膨大な報告書を幕府に提出したほか、明治政府に必要とされ開拓判官に就いた。武四郎の業績は、北海道の沿岸・内陸を問わず踏査し膨大な記録を作成したこと、蝦夷地に関する多くの書物を出版したこと、北海道の名づけ親として、国・郡の範囲を定めその名称を選定したこと等が上げられる。北海道各地にある身近な足跡に触れることから、その業績を知らしめ親しまれ将来に伝える手掛かりとなることを期待したい。

